

風の唄（あさのあつこ）

有川 梨沙、石川 奈緒美、亀井 華、栗村 隆太郎

一 作者と作品について

あさのあつこは、一九五四年に岡山県に生まれた小説家・児童文学作家である。青山学院大学文学部を卒業後、小学校の臨時教師を2年間務め、その後歯科医と結婚する。子育てが一段落した頃、大学時代に指導を受けた作家の後藤竜二に誘われて同人誌『季節風』に原稿を寄せ、その時に連載した『ほたる館物語』が認められ、一九九一年、新日本出版社から出版され作家デビューをした。一九九七年『バッテリー』（一九九六年、教育画劇）で幅広い世代の支持を得て、児童文学としては異例の一〇〇〇万部のベストセラーになり、野間児童文芸賞を受賞する。その後、一九九九年『バッテリーII』（一九九八年、教育画劇）で日本児童文学者協会賞を受賞、二〇〇五年『バッテリー』全六巻（一九九六～二〇〇五年、教育画劇）で小学館児童出版文化賞を受賞、二〇一一年『たまゆら』（二〇一一年、新潮社）で島清恋愛文学賞を受賞している。

作品のメディアミックスも多く、『バッテリー』は漫画、テレビアニメ、映画、テレビドラマなど多くの媒体で知られている。また他にも『ほたる館物語』が漫画化されたり、『NO.6』がテレビアニメ化されたりしている。

「風の唄」は、二〇〇八年五月三十一日に小学館から出版された『金

色の野辺に唄う』に収録されている。『金色の野辺に唄う』は、九十二歳の松恵の臨終に際して、松恵に救われた、娘、孫の嫁、曾孫、近所の花屋の店員のそれぞれの思い出と想いを描いた、あさのあつこ初の連作短編集である。「風の唄」はその中で曾孫である東真についての話で、絵と同級生の映子との関係の中での東真の心情を、色彩豊かに書き出した作品である。

教科書には、二〇一二（平成二四年）度版、東京書籍「新しい国語3」から掲載されている。生徒の感性を磨き、広い視野と想像力を養うため、現代の書き手による新鮮な作品、心にひびく作品として取り上げられた作品で、学習するのは東真と同じ一五歳、中学三年生の生徒たちであるということから、作品を通して自分の生き方についても考えて欲しいという狙いがある。同様に生徒の感性を磨くための作品として、「風の五線譜」（高階杞一）、「楼蘭の夜」（平山郁夫）が取り上げられている。

教科書で「風の唄」を学ぶ生徒たちは、他に以下の作品を学習する。他の教材と比べ、「風の唄」が新しい作品である事が分かる。

一年 さんちき（吉橋通夫）、少年の日の思い出（ヘルマン・ヘッセ）、トロッコ（芥川龍之介）

二年 字のない葉書（向田邦子）、卒業ホームラン（重松清）、走れメ

ロス（太宰治）、坊っちゃん（夏目漱石）
三年 形（菊池寛）、故郷（魯迅）、最後の一句（森鷗外）

二 叙述について

雪が降ってきた。

雪の情景が浮かび、白いイメージを連想させる。しかし、読み進めるとまだ秋であることが分かる。「降ってきた」と表現していることから、雪が降りはじめたと、この時に東真が認識したことが分かる。

顔を上げ、ふと見やった窓の外を白いものがふわりとよぎったのだ。

東真が、雪が降って来たと思った理由が「白いものがふわりとよぎったのだ」と、説明されている。しかし、降ってきたものが、「白いもの」と漠然と表現されており、また、それが「よぎった」としつかりとは捉えられていない様子が描かれている。このことから、その理由の不確かさが良くわかる一文である。

耳障りなようでどこか哀しげな声だ。

「耳障り」のやかましくうつとうしいイメージと、「哀しげ」の静かで頼りないイメージの相反する言葉を並べている。実際に「哀しげな声」で鳴いているのか、東真の今の心情から普段であれば「耳障りな」泣き声が、「哀しげ」に聞こえたのか、と考えることができる。

大ばあちゃんを迎えに来ているんだろうか。

「の」が撥音便化し、「ん」になっている。これにより、「の」とす

るよりもよりリズミカルで親近感のある表現になっている。また、この文は、唐突に物語の中で「大ばあちゃん」の死をつきつけてくる。より親近感のある表現にしたのは、それをより読者にも近しく受け取らせる効果を狙ってか。

東真の皮膚にびたりとくつついて、どんどん体温を奪っていくような冷たさだった。

「びったり」ではなく「びたり」となっていることで冷たい印象を受ける。加えて「体温を奪っていくような」から自らに危機迫る、また、それがどうしようもない力であることを想像させる。死に直面している大ばあちゃんに、触れることで、死を自身にとつてはいつか危機となり得るものとして認識するとともに、それがどうしようもない物であることを客観的に捉えていることが分かる。

そうか、人つてあんなふうに死んでいくものなんだ。

死ぬということがどういうことか現象としては理解しているが、曾祖母の死からよりリアルに実感している様子が「ものなんだ」から、うかがえる。

確かに生きていたものが、消えていく。

前文の「徐々に」からも分かるように、ただ「消える」のではなく、だんだんとまた少しずつ消えることが、「消えていく」という表現からより強く読み取れる。また、漠然と認識していた死を、「確かに生きていたもの」（＝曾祖母）が、「消えていく」（＝死）から身近なものとして実感している。

曾祖母の体を通し、死んでいくことはぼんやりと感じ取れても、百年近くを生き続けるなんて、まるで実感できない。

曾祖母の死に関しては実感できた東真であるが、それに向かうために積み上げてきた時間の大きさに対して逆に驚き、戸惑っていることが分かる。(戸惑いに関しては前の三文からよくわかる。)また、今、死にゆこうとしている曾祖母の身体には、百近い積み重ねがもう欠片も感じ取れなかったと読むこともできるか。

熟した柿の実は秋の陽光に照り映えて、燃え上がる焔そのものに見えた。前半部分の描写から熟した実の様子が鮮明に浮かび、「焔」という例えも柿の実の熟れていて美しい様子を更に強調している。また、固い言い回しで表現されていることで、より強烈に柿の様子を表現している。

曾祖母が自分に遺そうとした言葉を聞きたくなかったのだ。

「聞きたくなかった」とあることから、物理的にはなく自らの意志で聞くことを拒んだことが分かる。また、「耳を塞ぎたくなくなった。」本当の理由がこの一文に集約されている。

決して燃え広がらない美しい焔が枝の先にともったようじゃないか。

普通の火のように燃え広がることはなく、変わらず同じ大きさで、小さいがしっかりと燃え続けている様子に美しさを感じている。これは、文末の「じゃないか」と問いかけるような表現から東真の感動具合が読み取れる。

陽光の当たり方で、たった一つの果実が朱にも紅にも茜にも色を変えていく様子に東真は、いつも見ほれてしまう。

「朱」「紅」「茜」と三つの言葉を重ねることで実の赤さの多様性とその美しさをさらに強調している。「朱」は黄色みを帯びた赤色、「紅」は鮮やかな赤、「茜」は沈んだ黄赤色・暗赤色であり、それぞれが微妙に異なる色彩を表している。このように同じ赤色でも東真には、三つの色がそれぞれ異なって見えていることから、東真の繊細な感性を感じさせる。

「ルンパ」は父の充と母の美代子がやっているレストランで、祖母は自分の作った野菜を定期的に届けに来る。

東真の家族のことと、祖母・曾祖母との人間関係が分かる一文である。

がきの絵なんかを額に入れて飾ったりして、何か……ばかみてえだ。

自分の絵を仰々しく額に飾っていたことに対する照れと、画家でもない自分の描いた絵を飾っていたことに対する恥ずかしさと、自分の描いた絵をそれほど大事にしてくれていたことに対する嬉しさが込められ得ることが、この段階までの読みでは読み取れる。しかし、後半の映子とのやり取りを読み振り返ると読み取り方が変わる。自身のことを「がき」と表現していることや、「ばかみてえだ。」と吐き捨てていることから、東真は、平凡な才能でしかない自身の能力を過度に評価し、額にまで入れて鑑賞している曾祖母に対して、嫌気を感じていることが分かる。一方で、「何か……」と、言葉に詰まっていることか

ら若干の罪悪感や心底嫌っている訳ではないことが分かる。

光に満ちていた風景がすばむように色彩を暗くする。

「すばむように」と表現することで、ただ暗くなるのではなく、周りから次第に明るさが小さくなっていくイメージを与えている。「色彩」という表現から東真が、普段の風景もキャンパスに描かれた絵のように捉えていることが分かる。

東真がこの家にいたとき寝起きしていた部屋は、今でも当時のままで、祖母が入ってきたドアにはクレヨンで描きなぐった線が、あるものは曲がり、あるものは波打ち、あるものはまっすぐなまま、残っている。

読点を打つことで描きなぐった線のそれぞれの様子が強調されている。また、色彩がなくなっただ後であるため、敢えて色に関する言葉を使わずに「あるもの」と無機質な表現を使っている。これにより、東真が見ている世界が非常に冷たい印象であることが実感できる。

この家の、この木の、この実を見るたびに思う。

家から実へと読者の視点を動かし、東真の柿の実へのこだわりを感じさせる。また「この」を、全てにつけることで、「一つ一つのものが他の代用品では意味がないのだ。」という東真の強いこだわりが読み取れる。

熟せば熟すほど、色彩は深みを増し、光は更に内へと籠もっていく。

光が「内へと籠もっていく」という表現から外見だけではなく、内側の実の芯まで赤く熟していることが読み取れる。また、色の深みを

「光」が「籠もっていく。」と表現することでより美しく表現している。

だけど、大ばあちゃん、俺、もう……。

「……」の部分には、描くことができない、描くことをしない、という曾祖母の想いに応えることができないう東真の気持ちが入るのだろう。読点で単語が区切られていることから、言葉に出来ない東真の想いが感じられる。

胸の上を拳でたたき、鼓動を抑える。

手で押さえるのではなく拳でたたいていることから、激しく込み上げる想いである鼓動を、無理やり鎮めようとしていると読み取れる。

目の前をふっと白いものが横切る。

最初は「よぎった。」と漠然と捉えた表現に留まっていたが、「白いもの」の動きを「横切る」と、以前より明確に捉えていることが分かる。

あるかなしかの風に流されて、東真の視界から消えていった。

「あるかなしか」と表現することで、非常に弱い風が吹いていることが分かる。一方で、そんな風にすら羽毛は流されてしまうという弱弱しさも分かる。

鼓動に合わせ速まろうとする呼吸を何とか抑え、東真はそっけない口調を使おうと、努力していた。

「努力」をしなければ、「速まろうとする呼吸」を隠すことができない

いほどの状況である。また、「何とか抑え」てまでも「そっけない口調」を使おうとしていることから、二人の關係に何かよくないことが起きたのではないかと推測させる。

無邪気に陽気に、屈託なくしゃべり合い、筆を動かしていた時期があったのだ。

「時期があつたのだ。」とあることから、今は、良好な關係でないことが分かる。「屈託」は一つのが気にかかり、他のことが手につかない様であり、「屈託なく」とはわだかまりや心配事が無く、すっきりとした印象を与えている。また、二人の仲の良さを表す表現を重ねることで、今とは全く異なる幸せな二人の姿がさらに強調されている。

おまえに言葉なんていらなんだ。

「なんて」という言葉より、東真は映子を使う言葉を軽視していることがわかる。映子の絵は言葉以上に自分の気持ちを表現できるものであると東真は思っている。

東真は唇を強くかみしめる。

「唇をかむ」という行為より、東真が悔しい気持ちを抱いていることがわかる。映子の才能を認め、感嘆できる度量が自分に無いことに強い悔しさを感じ、それが表面に現れている。

自分がどのくらい見当外れの愚か者だったか思い知ったのは、二年生の秋、映子の部屋で偶然、油絵のキャンバスを見つけたときだった。

「思い知る」は身に染みてわかるという意味である。東真は自分が

映子に対して抱いていた、守ってあげたいというイメージが自分勝手での外れであつたということ、嫌という程、身に染みたのだ。一方で、自分の才能がいかに平凡なものか思い知ったようにも捉えられる。また、現在はおそらく三年生の秋であるので、それを知ったのは約一年前であるという事も分かる。

東真はバラの、映子は東真の横顔の絵を持ったまま目を合わせた。

映子がバラの絵を取っておらず、そのことを気にとめていない様子であることから、絵を見られるのが嫌だった訳ではなく、東真の横顔を描いていたのを知られるのが嫌だったのだということが分かる。

ちよつと肩をすくめて、笑いかけてやれよ。

「肩をすくめる」という動作は、やれやれしようがないという気持ちを表す行動であり、東真は気にせず許してやりたいという気持ちを持っていることがわかる。しかし、自分に対して笑いかけてやれよと言っていることより、実際はしたいと思ってもできないと分かっているため、皮肉となっている。また、笑いかけてやれよという表現は自分への鼓舞というようにも捉えられる。

笑ってみるよ、東真。

「〜してみる」は試しに行うというときに使われる。しかし、ここでは試すというよりは故意に行うという意味で使われているように思う。よつて無理やりにでも自分にさせようとしているように思う。前文までの「笑ってやれ」に引き続いた強調の役割も果たしている。また、自分自身を名前で呼んでいることから、実際に行動をする自分

とは違う少し離れた視点から見ている自分が語りかけるように感じている。

見とがめられるのが嫌で、近くの川原まで運んで火をつけた。

「見とがめられる」とは、「非難する、問い責める」の意味である。「見とがめられる」と思っていることから、罪悪感を持つている。火を使って燃やすという行為に対してと自分の絵を自ら燃やして処分していることに対しての二つの捉え方ができる。

焰は柿の色と重なり、しかし、果実の静謐とは無縁の猛々しさで何もかも灰にしてしまう。

「何もかも」という部分に絵だけではなく、自分自身の今までの絵や映子に対する思いも含まれているように思う。この部分で自分の中で気持ちを消してしまおうと決心したように推測される。また、柿と焰の二つを対比させることで、柿の絵を描いていた時の東真と絵を燃やして、激しく燃えさかる火を見る今の東真の心情も対比している。

退くことで東真は、曖昧にぼやけていた自分の心の、想いの一端をはっきり捉えることができた。

「ぼやける」と「はっきり」と対の語句を使用していることにより後の文が強調されているように思う。また「想いの一端」とあることから、東真が自分の心すべてを捉えてはいないということがわかる。

傍らにいて自分の凡庸さを突きつけられるより、映子と離れるほうがまだ、ましだった。

まだの後に読点があることより、ためらいの気持ちが含まれていることがわかる。「まだ」には、「どちらもよくはないけれど」の意味が含まれているため、このことから両方嫌であったと思っっていることがわかる。

雲が広がり始めていた。

これまでは空は晴れて日が差していたが、ここで天気が悪くなっていったという事が読み取れる。この時点では東真の考え方や気持ちに変化はほとんどないが、これから東真の気持ちに変化が起こることを暗示しているように思う。

まばたきしていた。

映子の突然の依頼に、東真が動揺していることが読み取れる。また、どこか客観的に書くことで、東真が映子の言葉に実感を持っていないということが分かる。

映子はまっすぐに東真のまばたきを目を見つめてくる。

前文の「まばたきをしていた」東真の目を、映子が見つめていたという事である。この二つを対比させることで、映子の決意を表現している。また、「見つめてくる」より、東真は映子に一方的に見られているという風を感じていることがわかる。

空に線を引くように、滑らかにまっすぐによぎっていった。

この部分で場面の変化が表現されているように感じた。表現は、キャンバスに絵を描くときの様子を連想させる。また、空の色と赤とん

ぼとの色が対比され、色彩豊かに感じた。

雲の切れ間から降りてくる光の中に、柿の木が立っていた。

曇っていた空の一部が切れて光が差し込み、舞台のような演出を見せている。雲は東真の心を表現しており、切れ間から光という部分より、東真の気持ちに変化がみえてきたことが推測できる。

ほろりと言葉が口をついた。

「ほろり」とはモノがもろく散り落ちるさまを表しており、「ポロリ」に近いように感じた。このため、東真は言おうとおもっていたわけではなく、気付いたら言ってしまったというように感じられる。また、口をつくという表現もすらすらと言葉がでるという意味があるため、今までは自分の気持ちをいえなかった状態との対比を表している。

この木は、いつからあの場所にいたのだろう。

「いた」というように擬人法を使うことから、柿の木を特別なものと思っているように感じる。またここでは急な話の転換が見られるが、東真の心が絵を描く、ということを意識したことで、祖母の言葉を思い出し、ふと生と死について思い至ったのだろうか。

映子とは思えない、断ち切るような口調だった。

断ち切るとは今までのつながりをなくす、切り落とすといった意味をもつ。これより、東真の言葉の後に間を与えずという意味のほかにも、今までの東真の中の映子のイメージを変えるという意味にも捉えることができる。映子が普段は優柔不断な言葉遣いであることと対比させ

て、絵に関する事への映子の態度が普段とは異なっているということを強調している。

髪がパサリと音を立てた。

髪が音を立てるほど、映子のはつきりと首を振って答えたという事が読み取れる。この表現があることにより、映子のかぶりを振っている動作が創造しやすくなる。

重く響く痛み在必死に耐えていた。

「痛み在必死に堪えている」とあることから、映子が東真の願いを切実に聞いてあげたいと感じていることが読み取れる。また「重く響く」の部分より、東真の言葉に心が揺れ動かされていることがわかる。だが、それでも描けないことを通そうとしていることから、ここでも映子の絵に対する意識が感じられる。

東真は、両手をだらりと下げて、小さくなる映子の後ろ姿を見つめていた。

「だらりと」より、東の体に力が入っていないということが表現されており、映子の言葉に呆然としている東真の様子が想像できる。だが意識まで呆然としている訳では無く、映子の姿はしっかりと目に入っている。

「私のために描いてくれるんやろ、東真。」

死んでしまったはずの曾祖母の声を東真は感じ取っている。これはおそらく東真自身の思いの表れであり、東真が曾祖母に理解されてい

たと感じていたことが分かる。自分の為にしか描けないといった映子の言葉と対比されることで、この言葉が強調される。

それは……できる。

「それは」とあることで、映子のように素晴らしい絵を描けなくても、他人のために描くことはできるのだということを表している。「……」の部分に東真の絵を描くことに対する決意があるように感じる。映子に出会って、描くことを諦めたが、映子とはまた違う絵との関わり合いを見つけて、新たに絵を描き始めることを決意したのである。

きれいだけど、ごく普通の少女の笑顔だった。

映子のことを自分とは違う才能がある人と思い、距離を感じていた東真が、「ごく普通の少女」というように感じたことより、ここではじめて東真は映子のことを自分と同じ立場であるということ、特別視することをやめたということが推測される。

東真は涙の跡と笑みに彩られた白い顔を見つめる。

涙と笑みという言葉が同時に使われており、対比されている。また、この表現より表情の豊かさも感じられる。「彩られた」は絵でよく使われる表現であり、作者のこだわりが感じられる。そのことを考えると、「白い顔」という表現も、今までの暗い気持ちとの対比だけではなく、真っ白なキャンバスというような捉え方もあると考えられる。

しゅうとめの奈緒子が声を掛けてきた。

序盤に記されていた「祖母の奈緒子」と同一人物であり、称しかた

を変えることにより、視点が変更されているという事を表している。東真でも映子でも曾祖母でもない「母」の視点からの東真の変化を見ようとしている。

制服を持って、裏庭に回る。

制服を置いていくこともないまま、息子の様子を見に行っていることが分かる。喪服(制服)を着ているわけではないのにふさわしい姿である東真の様子につながってくるように感じる。

その姿が、葬送の場には何よりふさわしいように思えた。

「何よりも」とはどんなものよりも一番という際に使われる。真剣にスケッチブックに向かう東真の背には神聖なものがあり、その姿は誰もが喪服を着て悲しむ葬送の場の中で、一番曾祖母が望んでいたものに思えたのではないだろうか。

それから、無言のまま家の中へと足を向けた。

「無言のまま」ということより、美代子は東真に一言も声をかけないまま家の中へ戻ったのである。ひとつ成長したように見える息子の姿を見て、美代子は声をかける必要が無いと感じ、声をかけて制服に着替えさせることよりも、東真なりの曾祖母への送りをさせようと思っただのかもしれない。

三 考察

(一) 東真における「赤」



『風の唄』では、赤を連想させる言葉が多く書かれている。その中でも特に印象に残るものは「焰」と「炎」の表現である。『漢字源 第五版改訂』によれば、「焰」は「めらめらと燃える火」を表し、「炎」は「盛んに燃える」ことを表している。「炎」は、一概に火そのものを表現しているのではなく、燃えている様子そのものをも表すようだ。では、この作品の中では意図的にこれらを使い分けているのだろうか。また、使い分けしているとすれば、どのように使い分けられており、さらにそれらが何を表現しているのだろうか。

まずは「焰」について考える。「焰」は、「熟した柿の実が秋の陽光に照り映えて、燃え上がる焰そのものに見えた。」「決して燃え広がらない美しい焰が枝の先にとまったようじゃないか。」「焰は柿の色と重なり……（中略）……何もかも灰にしてしまう。」の三文で使われている。これら三文の共通点は柿の実である。前二文は柿の實の比喩として、最後の一文は火そのもののことを言っているが、三行前に「めらめらと炎が上がる。」と火を「炎」と表現していることから、火としての意味よりも柿の實に対応して使われた表現であるといえる。このことから、東真は柿の實に対して焰のイメージを深く結び付けていることが分かる。そして、「焰」＝「柿の實」とすれば、その火は「灯る」が最もしっくり当てはまる表現である。

次に、「炎」についてである。「炎」は、「めらめらと炎が上がる。」「炎だ。」「全てを食らい、全てを灰にしてしまう炎」の三文で使われている。これら三文の共通点は、実際に他を飲み込む動きがあることである。この「炎」は、先が「灯る」であったのに対し、『漢字源 第五版改訂』からも分かるように、「燃える」が最もしっくりと当てはまる。実際に見ていくと、一文目は東真が自分の絵を燃やしている場面

である。二、三文目は、映子の意志、情熱の強さに東真が飲み込まれている場面である。事実、この場面で東真は言い返すこともできず、また反応したとしても言葉を濁している。また、教科書の『風の唄』は省略されたものであるため、記述はないが、映子が東真にモデルになってほしいと必死で頼む場面で、東真は映子の様子を「映子が炎に包まれる」「映子、燃えてるぞ、燃えてる。」と表現している。これらのことを踏まえると、「炎」は映子に関係することに集中的に使われている。一文目もよくよく考えれば、その行動の発端は映子の絵である。

そして、東真は敢えて、破るでも、切り裂くでも、捨てるでもなく燃やした。「炎」に自身の内にあった「焰」が飲み込まれていく様は何とも象徴的とは言えないだろうか。であるならば、「炎」という言葉は映子に対して東真が抱いているイメージ、つまり映子を象徴していることが分かる。

さて、これらのことから「焰」と「炎」が使い分けられており、それぞれが「柿の實」と「映子」を表現していることが分かった。では、これらのことを踏まえ、東真にとっての赤とはどういったものであったのだろうか。

柿の實と映子は両者とも東真にとって美しいものである。確かにベクトルは違うが、柿の實の「焰」、映子の「炎」に東真は惹かれている。ならば、東真にとって赤とは美しいものの象徴であるのではないだろうか。そして、美術部の人間としては、その美しさの評価指標は自身の中で大きなアイデンティティを占める。実際に東真は、赤で描かれた映子の真紅のバラを見て彼女との画力の違いを痛感する。赤を美しきものと評価しているのは、紛れもなく東真であり、美術におけるその美しさの指標は、東真にとって重要であったことは想像に易い。故

に、赤という評価指針で描かれたバラは、同じ赤を使った柿の実を大きく飲み込み東真の自信を喪失させた。つまり、東真における赤とは美しきものであり、その根底では自己のアイデンティティの一翼を担っている価値観であったのではないだろうか。

(二) 風景描写と東真の心情変化に着目して

本文全体を通して、光、風、雲など自然に関する描写がいくつも見られる。本考察では本文を、順を追ってみていくこととする。まず、「祖母が入ってきたと同時に日が陰る。光に満ちていた風景がすぼむように色彩を暗くする。」という場面の後の回想場面から急に色彩のトーンが下がり、まるで東真が曾祖母の死の知らせを予想していたような印象を与えている。そして、その後、実際に祖母から曾祖母が亡くなったことが告げられる。また、「視線を上げ、空を仰ぐ。雲が広がり始めていた。」と描写されている場面は、映子と距離を置くことになった一件を思い出し、様々な思いを巡らせた後の締めくくりの一文である。映子の才能に気付いた衝撃や、それを認めるだけの度量が自分に無かったことに対するふがいなさ、また映子への本当の気持ちなど、東真の中で消化出来ない心情部分が「雲が広がり始めていた」という部分に、晴れることのないもやもやしている様子としてよく表れている。

次に、東真が映子との関係や絵を描くことに対して変化を見せる後半部分「日が陰る。風が強くなる。刈り入れ間近の稲がシャラシャラと軽い音を立てる。」「風が田の上を走る。土と稲穂の匂いが鼻腔に流れこんできた。」という二カ所の描写に着目する。

まず、東真と映子、二人の関係が崩れて初めて、映子から絵に対す

るまた東真に対する気持ちを打ち明けた場面である。それでも東真はそれに応えることが出来ず、関係が崩れたあの時と同じことを繰り返そうとしていた、その時に、「日が陰る。風が強くなる。刈り入れ間近の稲がシャラシャラと軽い音を立てる。」と描写されている。その後、「東真は両手をだらりと下げて、小さくなる映子の後ろ姿を見つめていた。」とあるように、映子をただ目で追いかけることしかできない無気力感や去っていく映子に対する切なさが表れている。また、この直後に曾祖母の声が聞こえ、やりとりが始まることから、日や風の変化がそれらを東真に予感させているとも取ることが出来る。

その後、曾祖母の言葉を受け「誰かのために、描くことはできる」と、柿の絵を描くことを決め、さらに映子という存在に向き合うことを決めた。その時の東真の心情の変化を描いた直後、「風が田の上を走る。土と稲穂の匂いが鼻腔に流れ込んできた。」とある。今日までどうすることもできなかった自分の中の葛藤を吹っ切り踏み出せた、前進した自分に対する晴れやかな気持ち「風が田の上を走る。」という部分に感じられる。また、今までは手の届かない存在に思っていた映子に対して、「ごく普通の少女の笑顔だった。」とする表現が、映子が傍らにいた頃のように隣に並んでいるように感じた瞬間を表している。その変化から、「映子の顔が輝く。」「彩られた白い顔」などの表記のように、さつきまでは陰りがあつた情景に、東真の心に呼応するように陰りが晴れていく様子が感じられる。さらにここでは、これまでの光や風といった視覚、触覚に加えて「土と稲穂の匂い」として嗅覚が働く。新たな感性が働いたことから、未来が開けた瞬間であり、東真自身成長したことを感じさせる。